

はじめに一立花先生と欧州を回って感じた「戦争」「歴史」

佐野 敦子

*この文章は 2015 年 1 月 19 日公開後、言葉の重なりや誤字脱字の修正を加えていますが、内容の変更はありません。

ドイツの研究をしていると、ナチス、そしてユダヤ人虐殺やアウシュビッツはなぜ起こったのかと、聞かれることがある。

私はいつもこう答えることにしている。

「あまりに要因が多すぎて、一言ではいけない」

これは、一部の人を落胆させる回答かもしれない。

だがナチス時代とアウシュビッツのことを知れば知るほど、こう答えるしかなくなるのだ。

私が知る限りでも、その原因や要素はさまざまで、複雑に絡み合っている。

当時のドイツの経済背景、キリスト教におけるユダヤの位置、欧州全体の状況

あそこまでの行為がなぜ起こったか、誰もとめることはできなかったのか、

それを突き詰めれば突き詰めるほど、

単純に答えられないことだとわかる。

そしてそれらは、現在にまで根深く残る要因でもある。

アウシュビッツがなくなっても、ユダヤ人への差別は、戦後も残り続けた。

それは現在のパレスチナ問題につづいている。

ルワンダ、ユーゴスラビア、ダルフル、

日常の差別に何らかの形で火が付いた大量虐殺（ジェノサイド）は、

冷戦後も起きている

差別はなくならない、

大量虐殺もなくならない、

これは人の世の宿命なのか

だからこそ、アウシュビッツは後世に伝えなければならない「遺産」なのである。

我々がいつ陥るかわからない「負」を、

そこに立つだけで思い出させてくれるのだから。

人がどうしても避けられない「差別」が、

どんな事態を引き起こしうるかを、を

いつだってみせつけてくれる

そもそも歴史をめぐる認識は、国家・時代・立場によってさまざまである。
語弊を恐れずにいえば、アウシュビッツには「ユダヤ人をはじめとした多くの遺体、髪の毛・義足の束が大量に見つかった」という事実しかない。
ナチスが建てた施設であるから、それはナチスが行った殺戮行為であるということになる。
そこに「ガス室」の跡、ガスの空き缶が大量にみつかった。
だから、チクロン B というガスで、ナチスが大量殺戮にいたったのだ、と。



第2 収容所ビルケナウに解放当時のままだに「ガス室」の跡

だが、「アウシュビッツの嘘」という論説が出ることもある。
それは、ナチスと「ガス室」の関係性が否定されかねない要素を含んでいるからといえる。

ナチスは退却時に「ガス室」を破壊した。
その部屋で何が起きたのかは、同胞の遺体処理を強制的に担わされたユダヤ人の特殊任務部隊（ゾンダーコマンド）しか知りえない。
だが機密保持のため、彼らも数か月単位で「交換」させられていた。
自らの運命を察したものは、自分がみたものを記し、メモを地中に埋め、痕跡を残した。
かろうじて生き残った「証人」も、
自分のみてきたこと、したことのおぞましき、
そして、ユダヤ人への差別が残り続けた戦後も、
自らの出生を隠し続けなければならなかった状況下では、口をつぐんだ。
ガス室で何が起こったかは、戦後発見された彼らからの遺言と、
しばらくたってやっと言葉にすることができた彼らの証言
ここに頼る部分が多い。

では加害側の証言はどうか。

ナチスの将校は、毒ガスを投入したあとは、その場を立ち去ったという。

「ガス室」はそういうつくりになっていたのだ。

ドイツ人の精神的な痛手を避けるために、

「ガス室」の中でうめき苦しみ、死にゆく様を、ドイツ人の目から隠した。

死の寸前まで生をもとめて、上部の換気口をめがけてうず高く積みあがった死体の山を、ドイツ人がみなくても済むように、「システム化」されていたのだ。

そして、当時のドイツ国家であったナチスは、その「ガス室」というシステムを破壊した。

それにより、ナチスと「ガス室」との関係を決定づける「証拠」も隠そうとした。

あまりにも愚かな行為といえないか。



第2収容所内「サウナ」にある台車。戦後、「死の池」から発見。



saita (c)

「死の池」。焼却され、砕かれた多くの人骨が台車で運ばれ、ここに捨てられた。

ポーランド語、英語、ヘブライ語での碑がたっている。

なお、博物館にドイツ語での説明書きは一切ない。

だが皮肉なことに、歴史を伝えるにあたって、主な役割を果たすのは、ときに罪を隠そうとする国家でもある。

なぜなら、国家自分の現在の存在につながる過去、つまり歴史をどう伝えるかは、そこに住む国民のアイデンティティ形成に大きな意味をもっているからである。

共有の歴史観をもつ人々が、その国の国民としてのアイデンティティを抱く。

だから歴史とは国家によって「切り取られた」形で伝わってしまう。

その切り取られ方も国家をめぐる状況によってかわってくる。

どのように「切り取られる」のか、その切り取られ方が変化するのか、ドイツのナチスをめぐる認識を例に考えてみたい。

概観すれば、ナチス、およびアウシュビッツの位置づけは、

加害側であるドイツの責任

→EU 統合を契機に欧州各国の責任

→キリスト教の責任

→人権への冒涇、に変化している。

その動きは、ドイツが第二次世界大戦の敗戦国から EU の一員としての変化、さらに EU が基本的にはキリスト教国の集まりであるという背景とも呼応しているのである。

加えて多くの命を奪った「ガス室」の原型は、排気ガスをひきこんだ車で連れまわし身障者を窒息死させた T4 作戦が引き金という認識も広がっている。これは身障者というマイノリティーの社会参加が注目されている動きともともなう。近年、ベルリンで T4 作戦の碑が設置された。つまり、ドイツのナチスを巡る歴史認識は、人権というレベルに及んでいるのである。それはドイツの国家を巡る状況がかわっていることと見事に呼応する。



ベルリンのフィルハーモニー近くにある T4 作戦の碑 sano (c)

だが、アウシュビッツに実際にたたずむと、いかに国家によって都合よく切り取られた過去しか、私たちは知らなかったのか、と実感してしまう。

「ガス室」とナチスの関係の証拠の有無など、もう大きな意味をもたない。

アウシュビッツは、国家が都合よく切り取っていったもの、切り取らなかったものもそのままに、1955年当時のまま佇んでいるのだ。

国家によって切り取られた、ひとつひとつの人生、その重みが、そこに残る、義足や髪の毛の山、線路、「ガス室」の跡、すべてが私たちに無言で語り掛けてくる。

切り取られてなるものか！と、そこで命を終えた人たちの無念さを伝えるように。

知ることと体験することの違い、それを伝える大事さと難しさも実感する。

いつの時代でも切り取ってはならない、繰り返されかねない歴史の教訓として、次代に伝える「遺産」を、どう残すべきか、それはいかに大変で大事な作業かということも考えさせられる。

私たち日本からやってきたものは、アウシュビッツに直接かかわった加害者でも被害者でもない。

しかし、訪れた多くの日本人はアウシュビッツでなんともいえない重苦しさを感じる。これはなぜなのか。

そして、このような思いは、どう「消化」したらいいのだろうか。

日本とは関係なかったこと、と「日本人」の都合で切り捨てていいのだろうか。

「切り捨てる」ことは簡単で、楽な手段であろう。

だが、私たちは、立花先生とアウシュビッツを巡ることで、「切り捨てる」ことができなくなった。

実際に戦争を体験し、キリスト教・西洋哲学にも造詣が深い立花隆というフィルターを通して、日本とヨーロッパが共有する歴史的事項、第二次世界大戦を直視せざるを得なかったのだ。

私たちは立花先生とアウシュビッツを旅した。

それは、先の大戦を、立花隆を通して間接的に体験した、ともいえるのではないだろうか。

同じことは「冷戦」についてもいえる。第2部では先生が周辺都市を回った様子を、ドイツ中心に書き起こした。これは立花隆との「冷戦の追体験」記録である。

立花先生は、アウシュビッツの前後に旧共産圏の諸国を旅した。

私はベルリンから同行したが、ベルリンで最初に先生が探し求めたのは、東ドイツ時代に見た「景色」だった。



旧東側・ウンター・デン・リンデンを歩く先生 saita (c)

ブランデンブルク門からつづくウンター・デン・リンデン通りに沿って、ずっと旧東側を歩いていても、先生はなにか釈然としない感じであった。

けれども、一番奥、つまり、旧東ベルリンの市庁舎であった赤の市庁舎前の大きな噴水をみたとき、先生は突然足をとめた。

先生の冷戦時の東ドイツの「歴史」がよみがえった瞬間だった。

当時を思い出し、語る先生の横にいた私は、先生と一緒に、先生が体験した旧東ドイツの姿、ひいては冷戦を実感した気分になった。

しかし、このように立花隆と「歴史」を体験したものの、私はそこで自分が感じた戸惑いや歴史認識に対する混乱から抜け出せず、しばらく放置していた。

だが、あれから数年を経た今、このもやもやした不快感を消化することができるのでは、ないかと感じている。

そして、アウシュビッツはなぜ起こったのか、と繰り返される問いに、いまなら、自分なりの答えが出せるかもしれないと思い始めている。

それは、歴史について、日本もさまざまな形で語りだしたことにより、アウシュビッツが他人事でないと思えるようになったからかもしれない。

ドイツやヨーロッパによって「切り取られた」歴史ではなく、当時の女性が置かれた立場や人権という土台でさまざまな著書・研究がでていることも、日本の戦争の歴史と共通に語りあうのを後押ししている。

ドイツも日本も、歴史をめぐる環境の変化は時代によってかわってきている。
だから、いまこの記録に向き合う時かもしれないと思うのだ。

実際に、アウシュビッツを巡る状況や認識は、まさにこのような周囲の変化を凝縮する形で
変容している。

具体的には、EU 統合と歩調をあわせるかのように、2000 年前後から EU の資金で保存活
動が進みはじめたこと、ドイツ人の教皇がアウシュビッツを訪問した際、虹が出たことが現
地で語られていることがあげられる。これはアウシュビッツがドイツ、EU、キリスト教と
の関係のもとで、意味合いが変化していることの顕れといえよう。

さらにいえば、アウシュビッツで囚人向けに売春婦がいたという事実が、歴史研究者から
徐々に語られるようになったことだ。これは現代社会で、女性の権利や男女均等が声高に叫
ばれている絡みである、といっても納得がいく。囚人向けの売春婦の存在は、アウシュビツ
ツの被害者が女性に対しては「加害者」であったということになるため、議論が交錯するこ
ところになる。だが、それが表に出せるようになったのは、女性人権という視点で戦時のこと
を語るようになった時代の変化の象徴といってもいい。

日本が自らの歴史を顧みる際に、この視点が無視できないのはいうまでもない。

このように、時代の変化とアウシュビッツの旅に思いを巡らせ、立花先生がアウシュビッツ
を回りながら発した言葉、現地の人に投げかけた疑問、話した内容の記録を見直すと、戦争
とか歴史というのはどういうものかを、今の世に伝えて欲しい、という声がどこからともな
く聞こえてしまうのである。

そのような彼方から届く声を少しでも伝えたい、そして、この文章を目にした方が、私たち
のアウシュビッツでの体験から、「歴史」「戦争」というものを感じ、このようなことが二度
と繰り返されないようにするには、どうしたらいいのか、考えていただけるきっかけになれば、
と願うのです。

戦後 70 年を迎える日本にて

2015 年 吉日

佐野 敦子